Osaka University Knowledge Archive

Title	戦間期における絹・人絹織物輸出拡大と染色・プリント工業の発展 : イタリアン・ファッション・システム形成の一側面
Author(s)	日野, 真紀子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/67175
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（日野　真紀子）	
論文題名	戦間期における絹・人絹織物輸出拡大と染色・プリント工業の発展 ：イタリアン・ファッション・システム形成の一側面

論文内容の要旨

本論文は、近代におけるイタリアのファッションの創成期である両大戦間期に、繊維工業の一部を構成する、人絹を含むイタリア北部の絹織物業産地コモを事例にその発展を歴史的に明らかにする。当該地方を事例に、具体的に、国内の人絹への製造転換、ビスコース法人絹からアセテート法人絹の製造への転換をきっかけに、製織工程の前後工程にあたる染色・プリント工程が発展することで、より付加価値の高い輸出製品の構成へと変化したことを確認し、そのプロセスを供給側から解明する。

第1章では、これらの変化のうち人絹製造と関連している人絹を含む絹織物輸出について、統計データと補完的な資料を用い、その通商環境や輸出市場、主な輸出製品が受けた影響を明らかにする。とくに1920年代と1930年代に時期区分をしてそれぞれについて検討する。

第2章では、新産業の核となった化学工業の発展とその一分野である染料工業の成り立ちについて検討する。化学工業は自給自足政策の観点からイタリアはドイツの技術を取り入れることによって自国の工業化を推し進めた。1930年代に入り、第一次大戦以前には製造不可能だったものも製造され、繊維関連製品の価格も下落し、国内繊維企業でこれらの製品の消費がすすんだ。

第3章では、1930年代から染料の開発と関係の深い染色工業について検討をすすめる。まず先行研究について触れ、次に、染色工の賃金の低下や加工賃の設定が定まることにより、染色設備をもたない企業に対するサービスが組織されていった過程を観察し、国際的な分業の観点から染色・プリント工業の受注の好条件が当該期に形成されていたことを示す。

第4章では、絹織物産地であるコモ地方に焦点を当て、人絹の導入における産地の対応について観察をする。まず、先行研究をみた後、コモ地方における第一次世界大戦以前の絹工業の成り立ちと、ミラノ市場の重要性を明らかにする。次に、大恐慌期のコモ産地がとった対策を明らかにする。第3節では専門的な知識を持つ労働者の育成に焦点を当て、主に1930年代の技術教育を考察する。第4節では、イタリアにおけるファッション創出について検討する。1930年代後半の政府と産業団体の役割が重要となり、イタリアの繊維工業における前方および後方工程が有機的に結び付けられ、また輸出への道筋が整えられた。これらの団体によって、産地における創造性に富んだ製品・企業が外国の市場で評価されるようになったことを明らかにする。

最後の第5章では、コモ産地における個別企業経営分析として、コモ地方を拠点として展開した大手絹織物企業FISAC社の事例をとりあげる。同社が産地における人絹導入や染色工程で先駆者となり、同業他社へ大きな影響力をもったことを観察する。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（日野真紀子　　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教授	鳩澤　歩
副 査	教授	山本千映
副 査	教授	ピエール＝イブ・ドンゼ

論文審査の結果の要旨

〔論文内容の要旨〕

本論文は戦間期におけるイタリア・コモ地方の人造絹糸（レーヨン）を含む絹織物製造・販売を中心とする絹織物業を対象に、産地としての対応の展開を精査した研究である。一次史料をふくむ多様な文献を駆使し、従来、経済史・経営史研究において必ずしも明らかにされてこなかったイタリアの主要産業の20世紀前半における展開をあとづけた。序章で本論文の背景に触れ、続く各章では具体的な調査結果を提示した。

第１章では1920年代後半の絹織物輸出の拡大要因をあきらかにした。第2章では大恐慌期に産地が直面した危機とそれへの対応を検証した。第3章では30年代後半に人絹輸出の拡大が起きた要因を政府の働きを主にまとめた。第4章ではコモ産地における有力器企業FISAC社の経営分析をおこなった。これらの展開への観察をふまえ、第5章・第6章では30年代の染料工業一般の発展と染色部門の発展との関連を論証している。

これらの観察結果により、イタリアの人絹をふくむ絹織物産業は大不況の前後に決定的な転換点をむかえたことが定量的にも定性的にも確認された。また、この発展は染色・プリント部門に関連する当時の化学産業の強い影響をうけていたことを、説得的に論証した。この点に、イタリア経済史・経営史研究において本論文が大きな貢献をもつものだとできる。さらに本論文においては、この20世紀前半の産地における一種の戦略が、その後のイタリアン・ファッション産業の展開(イタリアン・ファッション・ブランドの確立)に結びついたことが主張され、産業史的な視点からその論証がこころみられる。現代的な産業の展開の歴史的起源に目をむけているのは、本論文の視野の広さ・視角のユニークさを示すものであり、この点も評価できる。もっとも、本論文においてはファッション・ブランド史研究という面では我が国経営史学界に伝統的な産業史的な偏りがみられ、この点においては分析の深化が必要である。「ファッション」という概念をより厳密に定義し、素材産業の視点をいったん離れた観察をおこなうべきであろう。しかしながらこれらの問題は本論文においては今後の課題とすべきものであり、本論文の経済史・経営史研究における高い価値を大きく損なうものではない。ことに加え、学界の今日的な水準をクリアした綿密な資料観察と実証による成果として、本論文は学界における地位を主張できるものであるといえる。

〔審査結果の要旨〕

本論文は、我が国においては研究対象とされることが比較的少ないイタリア経済を取り扱い、その代表的産業の展開に経済史・経営史的な観察・分析を加えた独創性の高い研究である。以上から、博士(経済学)　に値すると判断する。

(以上)